

# 治子神社

(下中条)

第51話



言い伝えによると、忍城主の成田氏が城の守護神として治子神社を祭ったとも、また、室町時代の応永八年に鎌倉から遷座したともいわれています。

祭神は、天照大神の末子治子大明神とも、あまのひなりのみこと天手長雄命ともいわれていますが、神社と寺が一緒であった時代の別当金蔵院は修験であり、その影響で当社の内陣には木造の聖観音像が祭られています。

当社と隣接する興徳寺を中心に「下中条の獅子舞」が残されています。十八世紀後半の天明年間に利根川の洪水があり、獅子頭が漂着したので神前に奉納し獅子舞を舞ったのが始まりといえます。

災難から村を守る厄神除けや四方固めのほか八月十八日の治子神社の例大祭（今日ではこれに近い日曜日）には神社と興徳寺で獅子舞が奉納されます。

弓、花、笹、注連、鐘巻かねまきなど奉納される多くの演目の中で、特に鐘巻は北埼玉地方に残されている演目であり、鐘の中の大蛇を獅子が退治する内容で、歌舞伎でおなじみの娘道成寺を題材にしたものです。さらに下中条の獅子舞の大きな特色は、棒術（棒剣道）が獅子舞と一緒に残されていることにあり、昭和五五年埼玉県指定民俗文化財に指定されました。

八幡神社  
(酒巻)

## 第52話



総合福祉会館の近くに鎮座しており、江戸時代の初期慶長十三年に社殿を再建したといわれています。

祭神は名前の通り八幡明神ですが、本殿には僧形八幡坐像が祭られています。この像は二七センチほどの高さの木造で、袈裟をかけた僧侶の姿を写実的に描いた像です。像の膝裏には宝永三年（一七〇六）に造られたことが墨書きされています。

神社に僧侶の姿の像というのは異質なものに見えますが、人々を救うために仏が神となって姿を現した形を表現したもので、本地垂迹説の思想から造られた像であるといわれます。

神社のある酒巻村には、江戸時代酒巻河岸があり、江戸への川道三二里、主として米の積み出しが行われました。

忍城主阿部家の時代には、阿部家のもつ手船があり、この手船頭を正田家が勤め年に二万四千俵の廻米を江戸に送ったといえます。文政六年に阿部家に代わって忍城主となった松平家はこの手船を廃止し、酒巻村名主中村家を廻米御用船世話役に任命し領内の村々の蔵から江戸屋敷まで年貢米の運送を担当させたといえます。

明治になり東京に移住する松平忠敬旧藩主を藩士一同涙して見送ったのもこの酒巻河岸でした。

十二所神社  
(北河原)

第53話



北河原小学校のすぐ北側に鎮座しています。創建された年代は明らかではありませんが、言い伝えによれば、この地に人々が入った当時、五穀豊穡を願う熊野大社より勧請したといわれています。祭神は天神七代命、地神五代命。江戸時代までは十二所権現と呼ばれ、現在でも「ごんげんさま」とよばれています。

社殿の覆屋の棟札に來迎院とあり、寺と神社が一緒であった江戸時代までは、修験とのかかわりがあったようです。

この神社で八月二八日（現在は近い日曜日）に行われている「風祭り」は、二百十日の風に稲がもまれると実をつけなくなるので、これをさける祈りをこめた祭りですが、かつては境内に芝居小屋をつくり白川戸、皿尾などから地芝居を招き盛大に行われていました。

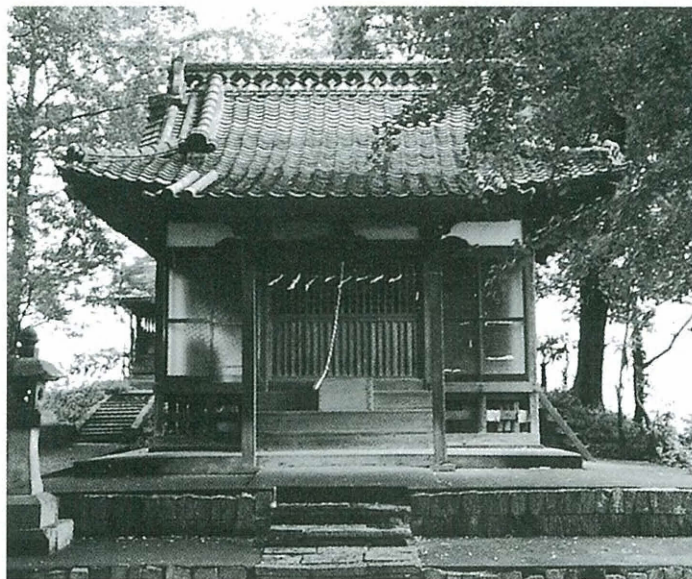
神社がある北河原は、南河原とあわせ、河原氏の所領で鎌倉時代初期に南河原を兄の河原高直が、北河原を弟忠家（平家物語では盛直）が領したと伝えられています。いつ頃から南北に分けて呼ばれていたかは明らかではありません。記録の上では十六世紀中頃に北河原の地名が出てきます。

河原兄弟は、源氏と平氏の一谷いちやの戦いの中、源氏方に属し生田の森（神戸市）の戦いで、先陣を駆け討死にしたことが「平家物語」などに出てきます。南河原村の観福寺にある板碑は兄弟の供養塔であるという伝承があります。

# 剣神社

(齋条)

## 第54話



酒巻の総合福祉会館の南、県道沿いに鎮座し、お剣様とも呼ばれ、齋条村の鎮守として信仰されてきました。社伝によれば、古代、景行天皇の時代に東国を征討した日本武尊の霊を当地を選んで祭ったのが最初であるといわれます。

市内には同じ日本武尊に関係する伝承を持つ剣神社が大宇持田にもあります。持田の場合は、日本武尊が東征のみぎり、たまたま当地を通過した際に、この地に宝剣(草薙剣)を杖としてしばし休まりました。その跡地に日本武尊と剣を祭ったのが始まりとされています。

社殿が乗る高台は、齋条一号墳と名付けられた古墳の一部です。かつて周辺には小規模な古墳が数多くあり、一括して齋条古墳群と呼ばれています。この古墳群は、酒巻古墳群と同様に、現在の水田下に埋もれた古墳群で、その規模、数についてははっきりしません。唯一調査された五号墳は、榛名山から噴出した角閃石安山岩で作られた石室を持っており、六世紀後半頃に造られたものです。

神社がある齋条の「条」は、隣接する「下中条」と同じで、古代における条里制に由来し、中世には「西条」の字が使われていました。忍城を築いた成田氏の天正十年(一五八二)の分限帳の中に、西条右衛門、西条隼人、西条太郎右衛門の三人の西条姓の譜代侍の名前が出てきます。

# 五所神社

(白川戸)

第55話



行田進修館高校と行田工業高校との間の道を北に進み、一二五号バイパスを過ぎ五百mほどの道沿いに当社は鎮座し、隣接して真言宗西明寺があります。

古くは御所明神社と呼ばれ、『新編武蔵風土記稿』では、「御所明神社 祭神不明」とあります。『忍名所図会』では「御所大座を配祀す」と記載され、『忍名所図会』では「御所大明神社 祭神不明」とあります。

『忍名所図会』ではさらに、近くにあった「白旗明神」のことが記載されています。白旗明神は、堤根地区にあったもので、戦国時代の天文年中（一六世紀半ば）、上杉謙信が忍城に攻めてきた時、ここで軍勢を揃えたが、その時一流の白旗を落としていった。それを土中に埋め、杉の木を植えておいたのですが、しかしこの場所も昭和十年代の耕地整理で壊されてしまったといえます。本来この場所にあったものか、五所神社の本殿裏側に、明治三十四年に建てられた白旗大神の碑が移されています。

同じ戦国時代の天正十八年（一五九〇）石田三成らの軍勢により忍城は水攻めをされますが、その時水をせき止めるために城の東側に半円形に取り囲むように堤を造りました。南は熊谷の久下付近から東に進み、堤根から北に転じ丸墓山古墳から長野を経て白川戸に至る長大な堤ですが、堤の東北方向の端がこの白川戸になります。

# 勝呂神社

(若小玉)

第56話



一二五号線の行田バイパスが武蔵水路、秩父線を跨ぐ行田大橋の南側に位置しています。

神社の周辺は、現在大字名を若小玉と呼び、鎌倉時代の『吾妻鏡』には、若見玉小次郎、若見玉次郎の名前が記載されており、このあたりに館をかまえていた武士と思われています。

鞘戸耕地に小次郎の館があり、屋敷鎮守の祠が残されていたが、江戸時代にはすでにみな陸田になり、痕跡は残っていない状態であったことが記録に残されています。

このように古くは若見玉の字が使われており、さらに『群村誌』によれば若子玉から若小玉へと変わったといえます。

神社の祭神は中筒男命。いつ創建されたかについては明らかではありませんが、江戸時代までは、近くにある真言宗遍性寺が別当を勤めていました。

勝呂神社は、近くでは南河原村にもあります。当社との関係は明らかではありませんが、南河原村の勝呂神社は、生田の森で先陣を取り討ち死にした河原兄弟で知られる河原氏が、もとは入間郡の勝呂村の出身で、移住するにあたり当所の住吉神社を勧請したもので、名前も地名を取り勝呂神社にしたことが伝えられています。

若小玉の当社では九月二十日の祭祀にササラ(獅子舞)が奉納されます。古くは雨乞いササラとも呼ばれ、『鐘巻』が代表的な演目として残っています。

## 八坂神社

(しもすど)

第57話



行田市の東側、国道一二五号沿いにある太田西小学校の近くに鎮座しています。

言い伝えによれば、鎌倉幕府から追われた一人の僧が、牛頭天王像を奉じて当地に住み着きました。この僧が当地に真言宗医王寺を開き、この寺の鎮守として、牛頭天王像を祭ったのが始まりであるといわれています。

古くは牛頭天王社とよばれていましたが、明治時代の神仏分離により、医王寺の管理を離れ、社名も八坂神社に改められ、主祭神も農耕の神様として信仰されているスサノオノミコトが祭られています。

社殿のかたわらに小さな池がありますが、昔、周辺の村々に疫病が流行したとき、医王寺の僧が村人に疫病感染の原因である生水を飲むことをやめさせ、代わりにこの池の水を煮沸して飲むことを進めたお陰で、この村は疫病から守られたといえます。

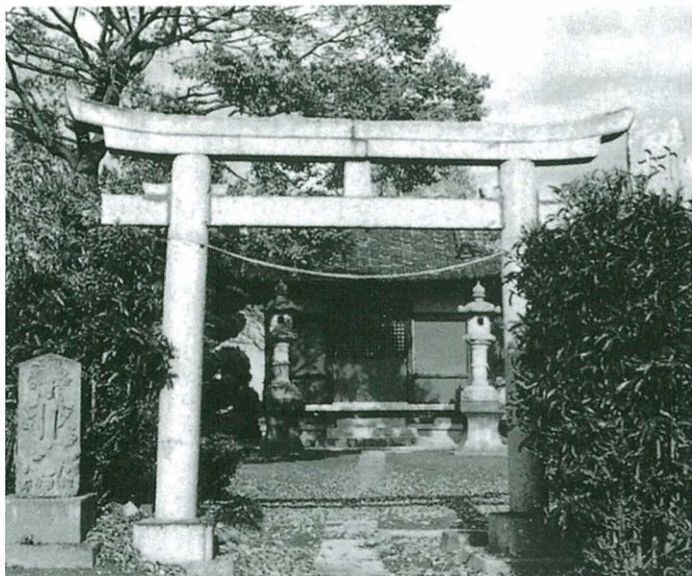
当社が牛頭天王社として信仰されていた江戸時代において、下須戸村は一時忍藩領であったこともありましたが、長く幕府領でした。

さらに、下須戸の、須は、州で中州の先端を意味するといわれます。行田市の地図を見ると良く分かりますが、南の荒川、北の利根川がかつて低地である行田市内を、乱流した痕跡が良く残されています。下須戸付近も乱流した川の痕跡が明らかに残る所であり、こうした地形から地名が付けられたのかも知れません。

# 藤間神社

(藤間)

## 第58話



藤間地区の見沼代用水沿いに鎮座しています。かつては、村内に稲荷神社、雷電神社がありました。明治四〇年に稲荷神社境内に雷電神社が合祀され、社名も稲荷神社から地名をとり藤間神社に改めたといえます。祭神は「倉稲魂」が祭られています。

この神は「倉稲魂」と書いてウカノミタマと読むことが『日本書紀』にあり、『古事記』の「宇迦之御魂神」と同一神でスサノオノミコトの子として出てきます。

ウカノミタマというあまり馴染みのない名前の神様に思えますが、実は五穀豊穰、商売繁盛の神様として全国で最も多く祭られている稲荷社に主祭神として祭られている神様で、私たちにとって身近かな神様です。

「倉稲魂」は、倉と稲魂いなたまとに漢字を分けて考えると理解しやすく、倉の中に祭られる稲魂の意であり、稲魂は稲霊いなたまで稲の穀霊を人格化したものといわれます。弥生時代から穂刈りをした稲を鼠などの害から守るために高床式の倉庫に保存していました。そうした風景と重ねると理解しやすい神名といえます。

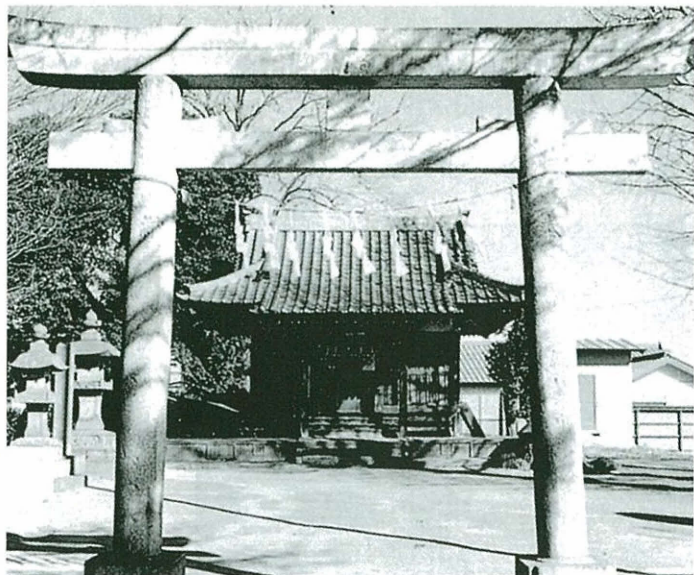
平成十年は天候不順のためか、米作りもやや不作でした。弥生時代の米作りが確認された星宮の小敷田遺跡の発見により、埼玉県において最も古い米作りの伝統を持つことが明らかになった行田の米作りです。新たな年を迎え、今年はいり豊かな年でありますよう期待しています。



# 日枝神社

## (小針)

第59話



古代蓮の里のすぐ北側に鎮座している日枝神社の創建については明らかでなく、『新編武蔵風土記稿』では、村内の鎮守として蔵王権現二社が載せられています。

主祭神は、大山咋神で、この神は、最澄の開いた天台宗延暦寺のある比叡山の麓の日吉大社、京都嵐山に近い松尾大社に祭られる神として知られています。

神々の系譜上この大山咋神は、スサノオノミコトの子の大年神が天知迦流美豆比売を娶って生まれた子の一人で、別の名前を山末之大主と称しています。

大山咋神の神名の意味は、大と山咋に分け、偉大な、山の境界の棒の意味で、山頂の境界を示す棒くいを神格化したもの。また、別名の山末之大主は山の頂上の偉大な主人の神の意味であるといわれます。

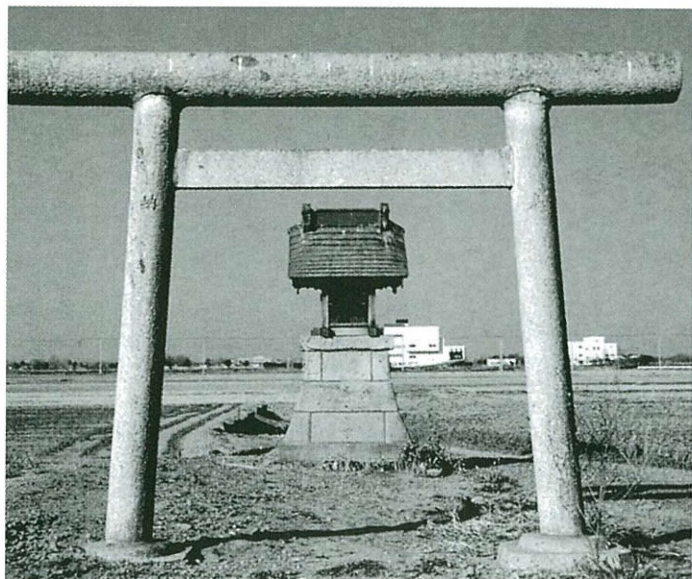
小針の当社は縁結びの神として信仰をあつめていますが、神社に伝わる話では、鴻巣市三ツ木の山王社（現在の三ツ木神社）は当社から分社したもので、当社が男の神様、三ツ木の山王社が女の神様であり、女性が良き男性を探す時は当社に、男性が良き女性を探す時は三ツ木の山王社に祈願すると良縁が成就するといわれています。

また昭和初期まで行われた当社の例大祭の行事である「浮かし灯籠」は、神社の西に広がる上沼、（現在の県営浄水場）に、梓灯籠一千基を浮かすもので実に壮観であったといえます。

宇賀<sup>うか</sup>神社

(埼玉)

## 第60話



下埼玉東方の水田中に鬱蒼とした自然林があります。ここは万葉集にも出てくるおさき沼の名残りです。森の中に江戸時代の忍城主阿部正因が建立した万葉歌碑があり、当社はその森の西前に鎮座しています。

当社の創始については、おさきという娘とのかかわりでいくつかの言い伝えがあります。おさきが沼に落ちたかんざしを拾おうとして沼にはまり死んだため村人がおさきの霊を小祠に祭った。あるいは沼に写った子供を助けようとして沼に入り死んだため。あるいは日照りで村人が困っているとき、自ら願いで沼に身を投じたところにわか雨が降り出したため村人が喜び石祠を祭った等々です。いずれにしてもいつしか強い神霊を祭ったものが、時代が下るに従い、農耕神としての稲荷信仰と神使のミサキ（オサキ）狐の信仰が習合し現在の宇賀神が祭られようになったものと考えられています。

宇賀神それ自身は、一月号の藤間神社で紹介した『古事記』の「宇迦之御魂命」や『日本書記』の「倉稻魂命」と同一神で穀霊と同一視された神です。やがて農耕に必要な水を支配する蛇神と食の神である狐神と附会し、豊饒神、豊漁神から福の神へと姿を変えていきました。古来より湿地帯であるこの地域での農作業は厳しく辛いものがあり、五穀豊饒を宇賀神に託した人々の願いもまたより強いものであったと思われます。